

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7-11
府教育会館704号
(TEL) 6765-8904
(FAX) 6765-8905

第32回 青年フェスタ オンラインにて開催!! ～学びあうことを大切に～



今年の青年フェスタはオンラインで開催されました

2月13日、青年フェスタ実行委員会の主催で、第32回青年フェスタが開催されました。例年は2日間の開催ですが、今年度はコロナ禍により、オンラインを活用しての1日開催となりました。「特別支援教育」の分科会にすることで、大障教と大教組障害児教育部(支援学級)との共同で意見交流をすることができ、大障教からは2つのレポートを発表しました。

大障教からの1つ目のレポートは、知的障害支援学校、小学部の先生からの発表です。日ごろから「お互いに高め合

う」「二人ひとりを大切に」することを大切にしていることを大切にしていって、またある児童の事例を発表されました。その児童は、発語が無く一人で過ごす事が好きで、ただ、だからといって人との関わりが嫌いなわけではないということに視点を置き、指導にあたってこれらしました。レポートからは、先生との関係性を築き、その先生と一緒に集団の中にあることで、次第に友だちへと気持ちをもむけ、友だちと遊ぶようになる様子が伝わってきました。また、授業では絵を描くことが嫌いでも、友だちを真似て黒板に描こうとする姿に成長を感じたことを挙げられました。最後に、一人遊びをしていた児童が友だちに関わりを持つようになってきている現状

全国障害児学級・学校学習交流集会に参加して

(感想その3)

二人でいるから一人になれる

今回、オンラインで開催されることになり、どんな感じになるのか不安がありました。講演と分科会に参加して、本当は集まることが一番ですが、思っていた以上に充実した時間となりました。別府哲先生の講演では、特に自閉スペクトラム症の子どもたちの人との関わりについて、特に今、人との距離を言われている中で改めて考え直しました。子どもの発達の様子をみると、支えとなる人との関わりがなかで人への信頼感を築いていくこと、「二人でいるから一人になれる(ウニコット)」という言葉が印象に残りました。分科会では、画面に全国の参加者が格子状に映し出され、スタート。2本の実践レポートは、自分が感じている悩みに近く、共感と新たな気づきがあり、とてもよかったです。そして、参加者からの発言でさらに深められ、交流の場がオンラインでも実現できてよかったと思いました。(東大阪支援学校 荒谷 美里)

裏面に続く

を通して、関わりをもとうとする。ことや表現しようとする。この大切さを話されました。2つ目のレポートは、肢体不自由支援学校、分校の先生からの発表です。このレポートでは、入院中のある児童の様子の変化から、「久しぶりに笑った」という言葉を拾って発表されました。在籍中には、手術と訓練が優先され、コロナ禍による影響で親とも会えずに過ごす子どもに、何を大切にすべきか悩みながら指導してきたことが話されました。行事など教育活動が制限されるだけではなく、外出も制限されるという今年度の指

導の難しさがあるなかで、運動が好きな児童が風船バレーの取り組みを通して楽しんでいて、これは、病院では元気な声でお喋りしているのに院内学級に来るとおとなしくなるという様子をとりながら、人との関わりの中で楽しく過ごせる場を作れないかと考えてきた結果でした。「久しぶりに笑った」という児童の言葉は、レポートを聞く側にもとても印象に残りました。今年度のフェスタは、例年のように集まったレポート交流とは違う雰囲気でした。しかし、支援学級からのレポートも含めて、日々の子どもの成長を大切にすることを改めて考える場となり、オンラインでも意見交流することができました。発表された先生方、ありがとうございました。

大障教ホームページアドレス <http://fc06331220171211.web2.blks.jp/> Eメール アドレス : fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp

「この裁判で私たちが一貫して求めてきたのは、愛する人と家族として共に人生を歩むという当たり前の権利を、異性愛者だけでなく、同性愛者をはじめとする性的マイノリティにも認めたいということです。」
3月17日の札幌地裁で「同性婚を認めないのは違法」とした判決が出ました。
現行の民法と戸籍法は、同性間の結婚を認める規定を設けていません。この規定が憲法に違反しているかどうかについて、裁判長は、法の下の平等を定めた「憲法14条1項に違反する」と判断しました。
司法判断の根拠となったのは、同性愛に対する科学的社会的認識の変化です。
世界保健機関が1992年に同性愛を疾病分類から削除したことをあげて、このころまでには、外国及びわが国において「同性愛は精神疾患ではないとする知見が確立した」と述べています。さらに、「性的志向は、人の意思によって選択・変更できるものではないことが明らかにされた」と指摘しています。
当事者のとりくみも意見判断の大きな根拠となっています。自治体が同性カップルの関係を公的に認証するパートナーシップ制度の導入は3月までに79自治体が増え、そこに居住する人口も総人口の3分の1を占めています。さらに権利の尊重や差別の禁止など性的マイノリティに対する基本方針を策定する企業数はここ3年ほどで2倍に増えています。
「幸せに生きたい人の選択肢を増やして」原告の切なる願いを叶えるために、同性婚を認める法整備が急がれます。



子どもの成長を語り合える仲間の存在が大切

いつもはまず、移動で旅行気分を味わい、ご当地名物を楽しんでから参加していたのですが、今年はコロナの影響で初のオンライン開催でした。うまくつながるかな、と心配でしたが、家族の協力も得て参加できました。

全体会の初めに、設置基準についての全教案が示されました。勤務校でも意見を集めました。全国から意見が集まってまとめられ、子どもたちが安心して豊かに学べる土台になっていると感じました。こんな大事なことを考える素晴らしい組合、と誇らしく思いました。

別府哲先生の記念講演は、今まで関わった子どもたちの事を思い出しながら聞きました。今の学校は、「できること」ばかり求められますが、子どもの内面を共感的に理解することが、大事ですね。教師も学んで成長する、私も若い時は、情熱に任せて子どもに押し付けてきたところがありました。先輩の先生から年賀状で頂いた文面での若い頃の私の姿を恥ずかしく思いました。

2日目の分科会も、共感して聞きました。「不安な気持ちを受けとめ」たり「願いを受けとめてもらった喜び」を感じると、「この人ならがんばってみよう」という関係が生まれ、「やってみよう」につながる。「自分でやってできた」実感、生活の主人公になることで、できた喜びを感じ、失敗した時、次がんばろうという気持ちが芽生える。子どもたちに教えてもらった成長していく姿です。こんな子どもの成長を語り合える仲間の存在が大切ですね。語り合っ、学び合っ、学習交流集会、今年も仲間とつながってよかったです。(光陽支援学校 佐々木起美子)

現場からしっかりと声をあげよう

1日目は、子どもをどう見るかについてのお話を聞く中で、自分の中の考えだけでなく、現場スタッフと情報を共有して、色々な場面を寄せ合いながら、子どもの姿を分析していくことの大切さが話されていました。経験の中だけの分析ではなく、様々な仮定(仮説)を加えながら色々と想像することと子どもの姿や行動をどうむすびつけていくのかということをやよりいっそう大事にしていきたいと思いました。2日目は、第15分科会「寄宿舎の魅力語ろう」では、全国からのレポート報告・討議を通して寄宿舎の魅力について再確認できました。

2日間を通じて感じたことは、あたりまえに生活することがしっかりと確保されること、それは行政の責任とそれを補償(保障)させるために現場からしっかりと声をあげていくことが求められていると感じています。

(大阪北視覚支援学校 白木 幸治)

集まって話をする事の大切さを痛感

2日目の聴覚障害分科会に参加しました。以前から、スマホとPCにZoomを入れていたので、スムーズにアクセスできました。当日は、PCにヘッドセットをつないで参加しました。

豊岡聴覚支援学校の「聴知併置校の取り組み」は、大阪の私たちにタイムリーなテーマで、自ら質問もして積極的に討論に参加できました。昨年10月に大阪府教育委員会から示された「知的障がいのある児童生徒等の教育環境に関する基本方針」に、「北視覚支援学校の老朽化に関して、聴覚支援学校の機能との併設等の是非などの検討」との文言が示されました。そこで、去る12月に大阪の聴覚支援学校4校の教職員で集まり意見交換をしましたが、聴覚とそれ以外の障害の併置校について、全国の実態を知りたいと思っていたところ、丁度事前にいただいた進行メモに、その答えが掲載されていました。

H30年統計の文科省資料では、聴覚単独が86校で多数ですが、聴・知11校、聴・知・肢3校など知的障害との併置校が比較的多いことが分かりました。一方聴覚と視覚だけの併置校は1校もなく、視・聴・知・肢を含む併置校は15校ありました。

豊岡のレポートでは、通常会話でなかなか意思の疎通が上手くいかない知的障害の子どもたちの中に、手話を用いて他者とコミュニケーションを取れるようになった子どもが現れることや、健聴である知的障害教育部門の子どもたちと過ごす中で聴覚障害教育部門の子どもたちの障害認識が生まれることが報告されていました。歴史的に人口の多くない地域の学校であるがゆえに、集団での教育活動の必要性も聴知併置校となることの背景にあったことなど、報告だけでは理解できないことを質問や討論を通じて理解することができ、オンラインとはいえ集まって話をする事の大切さを痛感しました。このテーマは聴覚支援学校教育を考えるうえでの視点の一つであることは、間違いありません。コロナ下で容易ではありませんが、引き続き多くの人たちと障害のある子どもたちの成長、発達のためどうしていったら良いかの意見を交わし、考え行動していきたいと思えます。

余談ですが、発言者の多くがスマホを使っていたからかどうかは分かりませんが、画面に顔アップでの登場でした。手話で話始めるものの、司会者から「もっと下がって手話が見えるように」と話を遮られてばかりだったり、「画面のもっと右に」と言われても本人には左右が逆なので、ますます画面の端に行くなど、オンラインならではのハプニング満載でもありました。

(だいせん聴覚高等支援学校 横山 晃彦)

子どもたちが何を
願っているのか
見つめたい

1日目全体会では、別府先生の話の中で「子どもの心を置き去りにしていないか」という点について、改めて今の現場のことを振り返ることができました。子どもが成長できるように“手伝う”ためにも、子どもたちが何を願っているのか見つめたいと思いました。

リレートークでは、医療や福祉の立場からの話を聞くことができて良かったです。福祉については、放課後等デイサービスとの関係を普段からどれくらい築けているのか、日々のやりとりを大事にしたいと思いました。

(寝屋川支援学校

樋口 真弓)

